様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　　５　月　２３　日現在

機関番号：　１１３０１
研究種目：　基盤研究(C)（一般）
研究期間：　2015～2017
課題番号：　１５Ｋ０２５００

研究課題名（和文）近世モンゴル語の成立過程の研究

研究課題名（英文）A study of Written Mongolian as an official language of Ching dynasty

研究代表者
栗林　均（KURIBAYASHI, Hitoshi）

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号：３０１５３３８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、清朝の公用語であったモンゴル文語について、官製の満洲語辞典（清文鑑）、官製史書、および档案（政府公文書）等の「官用」モンゴル文語文献資料の言語的特徴を明らかにした。これに基づき、17世紀以降のモンゴル文語を、木版刷の仏教経典に用いられた「古典式」モンゴル文語と、規範からはずれる「世俗的」文献に分ける従来の捉え方に対して、「官用」のジャンルを加えて「近世モンゴル文語」という枠組みで捉え直した。
研究の基礎資料として作成した各種「清文鑑」と官製史書を含むモンゴル文語のデータベースに基づき、テキストデータと原本の画像データをリンクさせた資料検索システムを構築してインターネットで公開した。

研究成果の概要（英文）：The Mongolian language was, besides Manchu and Chinese, one of the official languages of the Ching dynasty from the 17th century to the 20th century. There exist a mass of materials of Written Mongolian in such as voluminous Manchu dictionaries, official histories, and documents of the central and local governments. We have investigated linguistic features of these materials compared with "classical Mongolian" which was used in the xylographic editions of Buddhist works and concluded that we should set the "premodern period" including classical(religious), secular, and official genres in the history of Written Mongolian.
On the basis of the database of "official" materials of Written Mongolian, which was made in the process of our study, a text search system with images of original materials has been released on the Internet.

研究分野：　言語学

キーワード：　モンゴル語　古典式モンゴル文語　清朝　清文鑑　満洲実録　档案文書

１．研究開始当初の背景

(1)17 世紀以降のモンゴル語の研究

モンゴル語史の時代区分に関しては、15～16 世紀における資料の空白期をはさんで、それ以前の 13～14 世紀を中世モンゴル語、それ以降の 17 世紀以降を近代モンゴル語と分けることに大方の見方は一致している。「中世モンゴル語」は、モンゴル帝国とその遺産を直接継承する時代のモンゴル語で、モンゴル族の興隆と拡大に呼応して、モンゴル文字、パスパ文字、アラビア文字、漢字等、様々な文字によって当時のモンゴル語の「音声」を記録した豊富な資料が存在することから、この時代のモンゴル文献の研究は、19 世紀以来盛んに行われ、多くの優れた成果が成し遂げられてきた。その一方で、17 世紀以降には膨大なモンゴル語文献資料が存在するにも拘らず、そのほとんどが伝統的な書き言葉である「モンゴル文語」で書かれた資料であることから、それらが書かれた時代や地域の口語の実態を直接反映する特徴は少なく、モンゴル語史の観点からの研究はほとんど行われていない。

しかし、近年、影印出版された清朝時代の大量のモンゴル語文献資料を見れば、モンゴル文語自体にも多様なバリエーションが存在することが明らかになっている。これらの資料を利用して、17 世紀以降のモンゴル語の研究を行うことが可能となった。

(2) 清朝の公用語としてのモンゴル語

N.Poppe, Grammar of Written Mongolian（Wiesbaden, 1954）**では、「中世モンゴル語」の時代のモンゴル文語を「先古典式」、17 世紀以降の木版の仏教経典に用いられたモンゴル文語を「古典式」と呼んで、大まかな時代区分を行っている。**

「古典式」モンゴル文語は、主にチベット語から翻訳され、木版で出版された仏教経典のモンゴル語である。仏典を翻訳するためにチベット語とモンゴル語の仏教用語集が編纂され、教義をモンゴル語で正しく伝えるためにモンゴル文語の文法が整理され、木版印刷のために文字の字形や綴りも画一化された。他方、同じ 17 世紀以降でも、仏典のジャンルに含まれない文献のモンゴル文語は「世俗的な」ジャンルと呼ばれてきた。「世俗的な」文書の代表としては、17～18 世紀に編纂された数々の「モンゴル年代記」を挙げることができるが、それらには「古典式」モンゴル文語に合致しない表記や形式が多く見られる。しかし、「古典式」モンゴル文語を中心にした見方は、それに合致しない形式を規範からの逸脱とみなすだけで、実際には「世俗的な」モンゴル文語の中にも独自の表記や文法の規範が存在したのではないか、という発想が生まれる余地はなかった。

17 世紀から 20 世紀にかけての清朝の時代に、モンゴル語は満洲語、漢語（中国語）とともに清朝の公用語として用いられた。清朝時代、御製・欽定を冠した官製の出版物には、満洲語とならんでモンゴル語と漢語の対訳が付され、中央の発令、地方からの表文、書状をはじめ、おびただしい分量の档案（政府の公文書）がモンゴル文語で作成された。このように、17 世紀以降のモンゴル文語を研究する際には、「聖」（仏教界）、「俗」（民間）という 2 つの領域に加えて、「官」（政治統治）の領域における使用実態を含めて研究することが不可欠である。

２．研究の目的

本研究では、17 世紀半ばから 20 世紀初まで「清朝の公用語」として用いられたモンゴル文語を「近世モンゴル語」として位置付け、その言語的な特徴と形成過程を研究する。

従来の研究では、17 世紀以降の木版本の仏教経典のモンゴル文語を「古典式」モンゴル文語と呼び、それに当てはまらないモンゴル文語を一括して「世俗的」なジャンルとみなしてきた。しかし、御製・欽定を冠した官製の出版物、中央の発令、地方からの表文、書状をはじめとする档案（公的文書）のモンゴル文語は、「清朝の公用語」として「古典式」モンゴル文語とは異なった過程を経て規範化され、それぞれ「規範化」の実態も異なっているとみなすことができる。研究では、具体的な文献資料によって、これまでの研究でほとんど扱われることがなかった「清朝の公用語」としてのモンゴル文語の使用実態と言語的特徴を精査し、この領域でモンゴル文語が規範化されていく過程を明らかにする。

具体的な研究目的は、次のとおりである：

(1)「清朝の公用語」としてのモンゴル文語の使用実態を明らかにする。

「清朝の公用語」としてのモンゴル文語を①官製辞書、②官製史書・勅語、③档案文書の 3 種類に分け、それぞれの領域における文献資料によって、モンゴル文語の文字・字形、綴り・正書法、文法形態、語法、語彙の特徴を明らかにする。

(2)「清朝の公用語」としてのモンゴル文語が規範化される過程を明らかにする。

モンゴル文語の使用形態のうち、木版で出版された辞書、勅語、あるいは精緻筆写された史書は、手書きの档案類に比較して点検・校正の過程を経て、より「規範化」が進んでいるとみなすことができる。両者を比較することによって、モンゴル文語のバリエーションと、規範化されていく過程を明らかにする。

(3)従来の「古典式」中心の視点に対して、「官用」の観点を加えて、17 世紀から 20 世紀にかけてのモンゴル文語を、「近世モンゴル語」という新たな枠組みで捉え直す。

３．研究の方法

(1)基礎資料の分類と整理、調査研究

本研究で「近世モンゴル語」として位置づける「清朝の公用語」としてのモンゴル文語を研究するにあたり、文献資料を次の①～③の 3 種類のジャンルに分類する：

①官製辞書「清文鑑」

18 世紀には、「清文鑑」と呼ばれる一連の官製の満洲語の辞書が編纂出版された。それらの中には、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』をはじめとして、1743 年序の『御製満蒙清文鑑（満洲文字表記モンゴル語）』、1780 年序の『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』、その後の『御製四体清文鑑』、『御製五体清文鑑』等、モンゴル語の語彙を含むものも少なくない。こうした「御製」を冠した辞書は、単語の綴り等、言語の規範化に極めて大きな役割を果たしたと考えられる。本研究では、これら一連の「清文鑑」におけるモンゴル語の語彙を研究対象として、それらの字形、綴り（正書法）をはじめとした言語的な特徴を検討する。

本研究は、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』を基礎にして研究を進める。この清文鑑は、モンゴル語が含まれる最も古い清文鑑であり、その後の清文鑑は、この清文鑑に含まれる約 1 万 2 千語の語彙をほとんど継承しているので、最も基礎的な資料とみなすことができる。さらに、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』には、見出し語だけでなく、モンゴル語で語釈も付されているので、辞典の規模からしても語釈という形態からしても量・質ともに優れた言語資料である。

清文鑑の語彙（見出し語）は、それらの意味によって分類、配列されているので、個々の項目を検索するのは容易でない。そのため、研究方法としては、この清文鑑のモンゴル語の見出し語と語釈のすべてをローマ字転写のテキスト・ファイルとして電子化し、データベースとして自由に検索できるようにする。1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』は天理図書館所蔵本がマイクロフィルム化されているが、落丁が確認されているので、図書調査を行ってそれを補う。

1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』に続くその他の清文鑑についても、語彙項目のモンゴル文語の電子化とデータベース化を行い、それらに収録される語彙の表記や種類にどのような変化があったか調査するための基礎資料を作成する。

②官製史書、勅語

官製史書としては満洲語・漢語・モンゴル語合璧の『満洲実録』（1781）を研究対象とする。勅語としては『三合聖諭廣訓』（1724 序、1874 重刊）のモンゴル文語を資料とする。

『満洲実録』は、勅命によって編纂された清太祖の実録であり、版本とも見まがう精緻筆写本である。今西春秋『満和蒙和対訳 満洲実録』（刀水書房、1992）ではモンゴル語のローマ字転写と日本語訳が公刊されているが、モンゴル文語のローマ字転写は今西氏独自のものである。本研究では、より汎用性のある共通のローマ字転写方式によって全巻をテキスト・ファイルとして入力し、全単語と語尾の索引のデータベースを作成して、研究の基盤を構築する。

勅語の資料としては、『三合聖諭廣訓』（1724 序、1874 重刊木版本）のモンゴル文語を研究対象とする。この文献は、清朝時代の翻訳科挙用のテキストとして用いられたもので、「官用」ジャンルのモンゴル文語の規範を形成する上で果たした役割は大きいと考えられる。モンゴル文語のローマ字転写をテキスト・ファイルとして入力してデータベース化する。

③档案文書（政府公文書）

清朝の公用語である満洲語、漢語、モンゴル語では、清朝の全期間を通じて中央と地方を問わずこれらの言語で膨大な量の档案（政府公文書）が作成された。本研究では、特に 17 世紀の清朝初期において中央政府で扱われたモンゴル文語を研究対象として取り上げ、それらの正書法や語法の特徴を明らかにした上で、それらが 18 世紀の清文鑑や官製史書、勅語のモンゴル文語とどのように関係しているかを明らかにする。具体的には、『満文原档』第一～第十冊（国立故宮博物院、2005）に含まれるモンゴル語文書、と『清内秘書院蒙古文档案彙編』第一～七輯（内蒙古人民出版社、2003）所収のモンゴル文語档案文書を研究対象として取り上げる。前者には、清朝成立直前の 1607 年から 1636 年までのモンゴル文語档案文書 47 件が収録されており、後者には清朝前期の 1636 年から 1670 年までのモンゴル文語档案文書 1,174 件が収録されている。

これらのモンゴル文語資料をローマ字転写して、テキスト・ファイルとしてデータベース化して研究の基礎資料とする。

(2)文献ごとの言語的特徴の研究

「清朝の公用語」としてのモンゴル文語を官製辞書（「清文鑑」）、官製史書・勅語、および档案（政府公文書）という 3 つのジャンルに分けて、その言語的特徴を検討する。いずれの文献資料においても分析方法は共通であり、モンゴル文語の文字・字形、綴り・正書法、文法形態（語尾）、語法、語彙といったそれぞれの領域の特徴を調査・整理する。それらは、共通のローマ字転写方式に基づいてテキスト・ファイルとしてデータベース化し、研究の基盤を構築する。

作成した基礎資料に基づいて、それぞれのジャンル間の言語的特徴を比較対照することによって、書き言葉としてのモンゴル文語の規範が形成されていく過程を検討する。

(3)文献資料のデータベース化と公開

本研究では、「清朝の公用語」としてのモンゴル文語の文献資料を、ローマ字転写のテキスト・ファイルとしてコンピュータに入力してデータベース化する。それらは、本研究の基礎資料となるものであるが、同時にモンゴル語史およびモンゴル文献学の資料とすることができる。

文献資料を入力したローマ字転写のデータベースを他の研究者が自由に検索、利用できるようにインターネットで公開する。データベースは、Web サーバに設置し、Web ブラウザを使って検索、表示できるシステムを開発する。また、それぞれの文献のテキスト・データと原本の画像データをリンクさせた検索システムを構築する。

４．研究成果

(1)官製辞書「清文鑑」のモンゴル文語

本研究では、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』のモンゴル語の見出し語と語釈をローマ字転写して、テキスト・ファイルとしてデータベースに登録した。原本の辞書本体部分は全 20 巻、5,000 ページに及ぶが、全頁をスキャナーで画像として取り込み、タグとして巻数とページ番号を付し、データベースに登録した。データベースに基づいて、モンゴル文語（見出し語と語釈のローマ字転写形）を検索し、検索結果から原本の画像を表示することができる検索システムを構築して、インターネットで公開した。

これと同様に、1780 年序の『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』、およびその後の『御製五体清文鑑』のモンゴル文語のローマ字転写を入力してデータベースと検索システムに登録した。

上記検索システムは、東北大学東北アジア研究センターのホームページで公開しており（http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/ftsdata/list?groupId=14）、利用制限は設けていない。

時代の異なるこれらの清文鑑の語彙項目を比較した結果、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』の語彙項目は、後続の清文鑑にほとんど同じ形で継承されていることが明らかとなった。すなわち、18 世紀の清文鑑におけるモンゴル文語の表記法（字形と綴り）は、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』の規範が、ほぼそのままの形でその後の清文鑑に継承されてきたとみなすことができる。

その後、19 世紀以降に編纂、出版されたモンゴル語辞典は、清文鑑（具体的には『御製四体清文鑑』）の語彙を引き継いでいるので（栗林均「近代モンゴル語辞典の成立過程―清文鑑から『蒙漢字典』へ」『東北アジア研究』第 16 号、2012 年、127-147 頁）、これは近世モンゴル語の成立過程の中で規範の重要な出発点として位置付けることができる。

清文鑑資料に関しては、栗林均『伝統的モンゴル語辞書資料集』（東北大学東北アジア研究センター、2015 年）を出版して、1717 年序の『御製（満蒙）清文鑑』をはじめ主要な清文鑑、およびモンゴル語辞書の「序」と「凡例」を影印資料集として公刊した。それぞれの清文鑑や辞書の編纂の目的や方針を確認するための資料とした。

また、研究発表「関于日本東洋文庫所蔵『満洲蒙古兼漢清文鑑』」（第二届蒙古文文献国際学術研討会、2017 年、北京）では、東洋文庫に所蔵されている『満洲蒙古兼漢清文鑑』を学界に報告し、一連の清文鑑の中における位置づけを論証した。

(2)官製史書、勅語のモンゴル語

官製史書としては満洲語・漢語・モンゴル語合璧の『満洲実録』（1781）を研究対象とした。ここでは、「清文鑑」資料と同様に、モンゴル文語をローマ字転写して、テキスト・ファイルとしてデータベースに登録したほか、約 1,700 頁の原本の影印をスキャナーで画像として取り込み、巻数とページ番号のタグを付し、データベースに登録した。モンゴル文語のローマ字転写形を検索し、検索結果から原本の画像を表示できる検索システムに登録してインターネットで公開した（http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/ftsdata/list?groupId=14）。

本研究では勅語の資料として『三合聖論廣

訓』（1724 序、1874 重刊）を取り上げ、モンゴル文語のローマ字転写を行った。

『満洲実録』のモンゴル文語では、子音字の<n>と<γ>に一貫して点のない字形が用いられている。これは、「清文鑑」資料とは異なるが、档案類にも多く見られる特徴である。『三合聖諭廣訓』（1724 序、1874 重刊）では、<n>と<γ>に点をもつ字形が使われており、この点は『満洲実録』等、欽定の資料とは異なる。『三合聖諭廣訓』（1874 重刊）に見られるこの特徴が初版（1724）の特徴を継承しているものかどうかについては、現時点では資料的な制限により、判断することはできない。

(3) 清朝の档案文書のモンゴル文語

17 世紀前半の『満文原档』第一～第十冊（国立故宮博物院、2005）に含まれるモンゴル文語の表記上の特徴については、栗林均、海蘭『「満文原档」所収モンゴル語文書の研究』（東北大学東北アジア研究センター、2015 年）でその実態を詳細に示した。それらの文書では、同じ語が別の綴りで書かれるといった、字形と綴りに多くの「ゆれ」が見られるのが大きな特徴となっている。

『清内秘書院蒙古文档案彙編』第一～七輯（内蒙古人民出版社、2003）所収のモンゴル文語档案文書には、清朝前期の 1636 年から 1670 年までのモンゴル文語档案文書 1,174 件が収録されている。これらの文書のモンゴル文語の特徴を検討したところ、「満文原档」所収モンゴル語文書と比べて、時代的にそれに継続するものであり、書かれた地域と文書量は異なるものの、字形と綴りに多くの「ゆれ」がみられ、規範として統一されていないという点では「満文原档」所収モンゴル語文書と極めて類似していることから、両者を同種の文献資料とみなすことに無理はない。

要するに、本研究で扱った文献資料としては、17 世紀の清朝の档案文書では、モンゴル文語の字形、綴り、語法（語尾）の表記において、統一的な規範は存在していなかったと考えられる。18 世紀初の官製辞書「清文鑑」において初めて明確な規範が示され、これがその後の清文鑑に継承された。18 世紀以降の、官製史書、勅語に代表される欽定の文書では「清文鑑」と同様の字形が採用されているが、子音字の<n>と<γ>における点の有無など、両者は互いに細部に差異を有する独自の規範を持っていたということができる。

本課題では、17 世紀半ばから 20 世紀初に至る清朝の公用語としてのモンゴル語を「近世モンゴル語」とする作業仮説を立てて研究を行った。研究では、木版印刷による仏教経典の「古典式モンゴル語」と、モンゴル年代記等の「世俗的」ジャンルに加えて、本研究で検討した「官用」ジャンルを加えて、清朝時代のモンゴル語をモンゴル語史の中で「近世モンゴル語」とする妥当性を論証した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　2 件）

①栗林均、関于日本東洋文庫所蔵『満洲蒙古兼漢清文鑑』」、第二届蒙古文文献国際学術研討会、2017 年 11 月 4 日、北京市（中国）

②栗林均、言語資料検索システムの開発と運用、東北大学東北アジア研究センター創設 20 周年記念国際シンポジウム、2015 年 12 月 5 日、仙台国際センター（宮城県・仙台市）。

〔図書〕（計　8 件）

①栗林均『オイラート文語三種統合辞典』東北大学東北アジア研究センター、2017 年、582 頁。

②栗林均『「東郷語詞彙」「新編東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』東北大学東北アジア研究センター、2017 年、268 頁。

③栗林均『土族語・漢語統合辞典』東北大学東北アジア研究センター、2016 年、596 頁。

④栗林均、松川節『『西蔵歴史档案薈粋』所収パスパ文字文書』東北大学東北アジア研究センター、2016 年、110 頁。

⑤栗林均『蒙漢字典－モンゴル語ローマ字転写配列－』東北大学東北アジア研究センター、2016 年、608 頁。

⑥栗林均『伝統的モンゴル語辞書資料集』東北大学東北アジア研究センター、2015 年、352 頁。

⑦栗林均、斯欽巴図『「初学指南」の研究－18 世紀の口語モンゴル語－』東北大学東北アジア研究センター、2015 年、392 頁。

⑧栗林均、海蘭『「満文原档」所収モンゴル語文書の研究』東北大学東北アジア研究センター、2015 年、264 頁。

〔その他〕

ホームページ等

http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/

http://www.gerel.net/

６．研究組織

(1)研究代表者

栗林　均（KURIBAYASHI, Hitoshi）
東北大学・東北アジア研究センター・
名誉教授
研究者番号：30153381